
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「アジア・アフリカ地理言語学研究」2022年度第2回研究会

日時：2023年3月25日（土）13:00–18:00, 2023年3月26日（日）9:00–16:30

場所：304, オンライン会議室

使用言語：英語

以下は各人による要約：

1. Chitsuko FUKUSHIMA (ILCAA Joint Researcher / University of Niigata Prefecture)

“Overview of the Systems of ‘Sibling’ terms in the Asian and African Languages”

前研究会での発表を踏まえ、各言語および言語群ごとのキョウダイ名の体系の型の割合を円グラフで表し、地図上に表示した。型ごとの分布が明らかになった。中国語に典型的なタイプD（兄・姉・弟・妹）がタイプC（兄・姉・年下のきょうだい）の分布を分断している一方、調査地域の西側に多いタイプE（男きょうだい・女きょうだい）も周辺へ広がっているように見える。また、同性と異性のきょうだいを区別する性差が関わるタイプF—FEは、ユーラシア大陸の北方、東方、そして東南に加え、アフリカの一部という周辺的な分布を示していることから、最も古いタイプである可能性がある。

2. Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher / National Ainu Museum)

“Numeral Systems: Classification and Symbols for a geolinguistic study”

数詞の体系に関する分類とそれらに対する記号を与えるために、Menninger (2011 [1969]) の枠組みを参考にした。数詞は5進法、10進法、20進法などの体系に大きく分かれる。純粹な20進法というのは、1から19までがすべて異なる語彙で呼ばれる必要があるため、5進法や10進法を用いて数える言語が多い。また、数詞を1~10、10~20、20以上という三つのカテゴリーに分けた場合、同じ言語であってもカテゴリーによって表示される体系が異なることは珍しくない。そのため、ここでは各カテゴリーの体系について調査し、複数の体系を持つ場合は重ねて表示することにした。また、どの体系に属するかは、基本数と基底数という考え方を取り入れ、さらに、上位起算減法、上位起算加法、下位起算法、倍数法、半数法という用語について共通理解を持ちつつ、分類にあたるということを確認した。

3. Kimihiko KIMURA (ILCAA Joint Researcher / TUFSS), Hiroshi NAKAGAWA (ILCAA Joint Researcher / TUFSS)

“Numeral Systems in the Kalahari Basin Area”

本発表では、カラハリ言語帯で話される 15 の標本言語について、数詞体系とその地理的分布について報告した。標本言語のうち 14 言語には元来数詞は 1~3 までの 3 つしか存在せず、4 以上の数を表す際には物を数える指折りジェスチャーを描写したイディオムを用いる。これらのイディオムは数詞とは別に 10 進法のような体系を有する。一方、ナミビアで話されるコエ・クワディ語族のコエコエ語は 10 進法の数詞体系を有し、この体系はコエ・クワディ語族のナロ語とトゥ語族の西部コン語へと借用されている。借用先の言語では従来の 3 数詞体系と借用された 10 進法の体系が併用されている。

4. Daisuke SHINAGAWA (ILCAA), Junko KOMORI (ILCAA Joint Researcher / Osaka University)

“Numeral Systems in Bantu”

本発表では、バントゥ諸語にみられる数詞体系のいくつかの類型特徴をとりあげ、その地理的分布について概観した。まずバントゥ祖語における再建形およびそのシステムを確認したうえで、二十進法システムの関与、「10」と「20」の語彙的対立、「10」の単複の語彙的対立、五進法ベースの有無といった類型特徴の地理的分布を提示し、その特徴を議論した。

5. Shuichiro NAKAO (ILCAA Joint Researcher / Osaka University)

“Numeral Systems in Nilo-Saharan”

主にスーダン以東に分布するニールサハラ語族のサブグループや近隣の孤立語における数詞体系を分析し、10 進法は全域に広くみられるが、加えて（エリトリアからウガンダにかけての）大地溝帯では 5 進法、さらに加えて南スーダン周辺では 20 進法を含むシステムが分布する傾向などを指摘した。また、スルマ諸語・南ニール諸語（および少数の東ニール諸語）には東クシ系の数詞の借用が見られること、100 や 1000 といった数詞についてはアラビア語・アムハラ語・オロモ語など近隣のアフロアジア諸語からの借用が見られることなどを報告した。

6. Youichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher / TUFSS)

“Numeral Systems in Semitic”

セム諸語はいずれも十進法である。11~19 は一の位と 10 の融合形が多い。20 は 10 に複数語尾などをつけた形である。30~90 は 3、4、5・に、アラビア語やヘブライ語など北西グループは複数語尾をつけ、ゲーズ語やアムハラ語などエチオピアグループは語尾 -a をつける。後者は、アッカド語の語尾 -ā と形は共通しているが同源かどうかは不明である。

7. Noboru YOSHIOKA (ILCAA Joint Researcher / National Museum of Ethnology)

“Numeral Systems in South Asia”

インド・ヨーロッパ語族（インド・アーリヤ語派、ヌーリスタン語派）、アンダマン語族、ならびに4つの系統的孤立語に関して、数詞体系に関して位取り記数法をタイプ分類して、地理的分布を見た。各語彙それぞれのパターンを見た結果として、全体の分布的特徴を言えば、①南アジア平地からヨーロッパのインド・アーリヤ諸語を始めとして、十進法を用いている言語が多いが、②カラコラム・ヒンドゥークシ地域ではインド・アーリヤ諸語、ヌーリスタン諸語、ブルシャスキー語などが共通して十進法と二十進法との組み合わせを用いていることが分かった。③イランのザルガリ・ロマニ語が十進法と五十進法という珍しい組み合わせを用いているのも発見した。④南島では、アンダマン語族が本来的に数詞を持ち合わせず、混合大アンダマン語が外部の言語との接触の下で、新規に「2」までの数詞を発達させようとしていたことや、⑤ヴェッター語がシンハラ語からの借用で、五進法で「10」まで数えることも明らかになった。

8. Nozomi KODAMA (ILCAA Joint Researcher / Kumamoto University)

“Numeral Systems in Dravidian”

ドラヴィダ系言語の祖体系は10進法の数詞体系をもっていたと考えられるが、インドアーリヤ系言語からの借用で数詞が置き換えられた言語に、20から100までに20進体系が見られるものが多い。この点の説明として、インド・アーリヤ系言語の10進体系で、11~99の範囲の数詞の fusion が進み、100進体系に近づいていることに着目し、借用の簡略化の改新であるとする仮説を提案した。10進的な簡略化では、10から19の10個と20から90の8個の借用語に1~9を組み合わせるものが多いが、score(20)を借用した言語の20進的な簡略化では、10~19の10個の数詞借用で99までが表せることになる。

10. Makoto MINEGISHI (ILCAA Fellow), Masaaki SHIMIZU (ILCAA Joint Researcher / Osaka University)

“Numeral Systems in Austroasiatic”

オーストロアジア語族の諸言語の数詞体系は、原則として10進法である。例外的に、インドのムンダ語族には20を基にした20進法がある。もうひとつの例外として、東南アジアのクメール語には6以上の数詞に5進法があり、30から90まで、100、1000、100000は隣接するタイ語からの借用語という独特の体系を持つ。

11. Aika TOMITA (Osaka Shoin Women's University), Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher / Aoyama Gakuin University)

“Numeral Systems in Kra-Dai”

Kra-Dai においては10進法型、下位起算法のみが見られる。しかし、同じ10進法型でも

その規則性には段階がある。もっとも規則的かつ分析的なタイプでは、1 から 9 までの異なる語形の基本数と基底数が規則的な順序で組み合わせられるが、基本数の形式が複数あるタイプや、11 から 19 のインターバルだけ基本数と基底数の順序が入れ替わるタイプ、20 以上で基底数を表示しないタイプなどがある。さらに、もっとも不規則なのは、20 のみ語彙的な形式 (saaw) をもつタイプである。この「語彙的 20」のタイプは南西タイ諸語に分布していることから、系統的には Kra-Dai の中で比較的新しい特徴であることが示唆される。タイ語や漢語、タイ・ヤ語には音韻的縮約の結果と見られるような「語彙的 20」の形式があるが、saaw を縮約によって説明することは難しい。たとえば南西タイ諸語で基本数 2 を表すのは soŋ であり、この形式は北方・中央タイ諸語でも広範に見られるが、2 を分析的に表す際に soŋ を使用する言語は今回見つからなかった。

12. Baiyan TANG (Chiba University), Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University)

“Numeral Systems in Hmong-Mien”

ミャオ・ヤオ語族の数詞体系について、1 から 99 までの数詞の構成について分析し、分類し、言語地図を作成した。分類に関しては、まず、プロジェクトの基準に従うと、すべての地点語について undercounting でありかつ decimal であることが分かった。したがって、この点では言語地図は一様分布をなす。次に、数詞の構成について分析したが、その結果、数詞の形式に 2 つの系列がある言語があること、2 つの系列が現れる数の多寡によって分類すると、一定の地理的な分布の偏りがあることが分かった。1 つの系列の形式のみを使用する地点語は、ミャオ語系の北部ミャオと東部ミャオ語であり、全ミャオ・ヤオ語族分布域の北寄り中寄りに分布する。一方、1 - 9 までのすべてで 2 つの形式を持つ地点語は、全分布域の東寄り南寄りの地域に分布することが分かった。これは、当該言語における漢語からの影響の多寡と相関関係があるのではないかと思われる。

13. Satoko SHIRAI (The University of Tokyo), Shiho EBIHARA (ILCAA Fellow), Kazue IWASA (ILCAA Joint Researcher / Nagoya University of Foreign Studies), Keita KURABE (ILCAA), and Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher / Kyoto University)

“Numeral Systems in Tibeto-Burman”

チベット＝ビルマ諸語の多くは 10 進法の数詞体系を持つが、それに加えて 20 進法、5 進法も見られる。また、計数法には下位起算法のほかに上位起算減法、上位起算加法、倍数法も見られる。地理的分布を見ると、10 進法が最も広く分布し、それに次いで 20 進法が広く見られることが分かる。20 進法はヒマラヤ山麓周辺地域、特にインド亜大陸の北端に集中して分布するが、中国北西部に例外的分布が 1 地点見られる。他の数詞体系は地理的な広がりには乏しい。以上の分布から、10 進法と 20 進法の相対的年代は不明であるが、両者とも他の数詞体系よりは古いと結論づけられる。

14. Atsuko UTSUMI (Meisei University)

“Numeral Systems in Austronesian”

Numerals in Proto-Austronesian (PAN) are reconstructed as a decimal system and various lower nodes of the Austronesian family tree have recognizable cognates. Austronesian-speaking areas, both west (Malayo-Polynesian) and east (Oceanic), therefore, predominantly exhibit a decimal system. Some languages, many of which are in close contact with Papuan languages, have a quinary system. Those languages are found in East Nusa Tenggara and Indonesian Papua, Papua New Guinea, and New Caledonia. A portion of them also exhibits a combination of quinary and vigesimal systems, mostly in Papua New Guinea and New Caledonia.

15. Ryo MATSUMOTO (ILCAA Joint Researcher / Kansai University of International Studies)

“Numeral Systems in Tungusic and Uralic”

ツングース諸語とウラル諸語における数詞の体型について報告した。どちらも基本的に一つの、10進法・下位起算加法タイプに属している。一部の言語に上位起算減法や20や30などの10の倍数に特殊な語形があるものがあるが例外的であるといえる。

16. Yoshio SAITO (Takushoku University)

“Numeral Systems in Mongolic and Turkic”

モンゴル系とテュルク系の諸言語は、基本的には十進法で下位起算法を用いているが、中国の甘粛省・青海省、アフガニスタン、イラン、カフカスに20や50を基準とした用法も部分的に有している言語がある。これらの特徴を持つ言語は分布地域全体から見て周辺部に位置しており、少なくともそれらの一部については隣接地域の言語の影響が考えられる。甘粛省の黄ウイグル語は古代テュルク語に見られる上位起算加法を持つ。

17. Chikako ONO (ILCAA Joint Researcher / Hokkai-Gakuen University)

“Numeral Systems in Chukotko-Kamchatkan”

チュクチ・カムチャツカ諸語の数体系について、チュクチ語は5進法と20進法、コリヤーク語とアリユートル語は5進法と10進法、イテリメン語は10進法の体系を持っていることを概観し、西イテリメン語の基底数10は基本数10とは異なり、さらに11などの加法に用いる基底数10と30などの乗法に用いる基底数10もそれぞれ異なることを報告した。

18. Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher / National Ainu Museum)

“Numeral Systems in Ainu”

アイヌの数詞体系では、1~9を基本数、10と20を基底数としている。11~19と21~29

は下位起算法で表現され、31~39は「2番目の20に向かって基本数+10」という上位起算加法で表される。40、60、80は、20進法で「2番目/3番目/4番目の20」と数え、30、50、70は、上位起算加法で「2番目/3番目/4番目の20に向かって10」と数える。樺太方言では、10をkunkutu、100をtankuとする10進法が見られたり、旭川・宗谷方言ではhotが20ではなく10を意味し、10進法になっていることもある。このほかにも、大きな数を独特の形で表す方言も見られる。なお、アイヌ語の6~9は語源的に上位起算減法と考えられている。

19. Fumiki SUZUKI (Nanzan University), Kenji YAGI (Kokushikan University)

“Numeral Systems in Sinitic”

漢語数詞体系は、十進法である。基数としての20(“廿”)をもつ方言があるが、やはり十進法と見なすことができる。また、1には“一”と“蜀”、2には“二”と“兩”の語彙差が見られる。

20. Rei FUKUI (The University of Tokyo)

“Numeral Systems in Korean”

韓国語の数詞には固有語によるものと漢数詞によるものという2つの体系がある。漢数詞は日本語の場合とほぼ同様なので、ここでは固有語の数詞を中心に扱う。固有語の数詞の体系は基本的には10進法の体系をなすが、20から90まで10の倍数の数詞は固有の形がある。その多くは基数×10と分析できるが、中には分析困難なものがある。現代語では、固有語の数詞で数えられる最大数は99で、それ以上は漢数詞が使われる。中世語の数詞も基本的に同様の体系をなすが、100と1000を表す数詞が存在する点が現代語とは異なる。個々の数詞の語源については、白鳥庫吉、小倉進平などの説が存在するが、それぞれ問題点があって、いまだ確実なことは言い難い。なお、中世語に特有の100と1000を表す数詞はチュルク語、モンゴル語、ツングース諸語からの借用語である可能性が指摘されている。

21. Kohei NAKAZAWA (Shinshu University), YOKOYAMA, Akiko (JSPS Research fellow / ILCAA)

“Numeral Systems in Japonic”

日琉諸語の数詞体系はいずれも10進法であるが、語種に地域差が見られる。1~10は和語系(ヒトツ、フタツ、…)と漢語系(イチ、ニ、…)の両系が見られるが、11以上になると本土諸方言は漢語系のみになるのに対し、琉球諸語では19または20まで和語系が見られる方言、さらに20または21以上でも和語系が見られる方言がある。古典語を中心に、基底数には異形態が見られる(towo~so「10」、momo~po「100」など)。和語系は原則として助数詞が必須だが、宮古語のitsi nu pītu「5人」のように和語系の数詞に助数詞が直接後続しない表現も見られる。さらに、和語系では数えるとき専用の「ヒー、フー、ミー」のような形式が存在する。